



妻籠

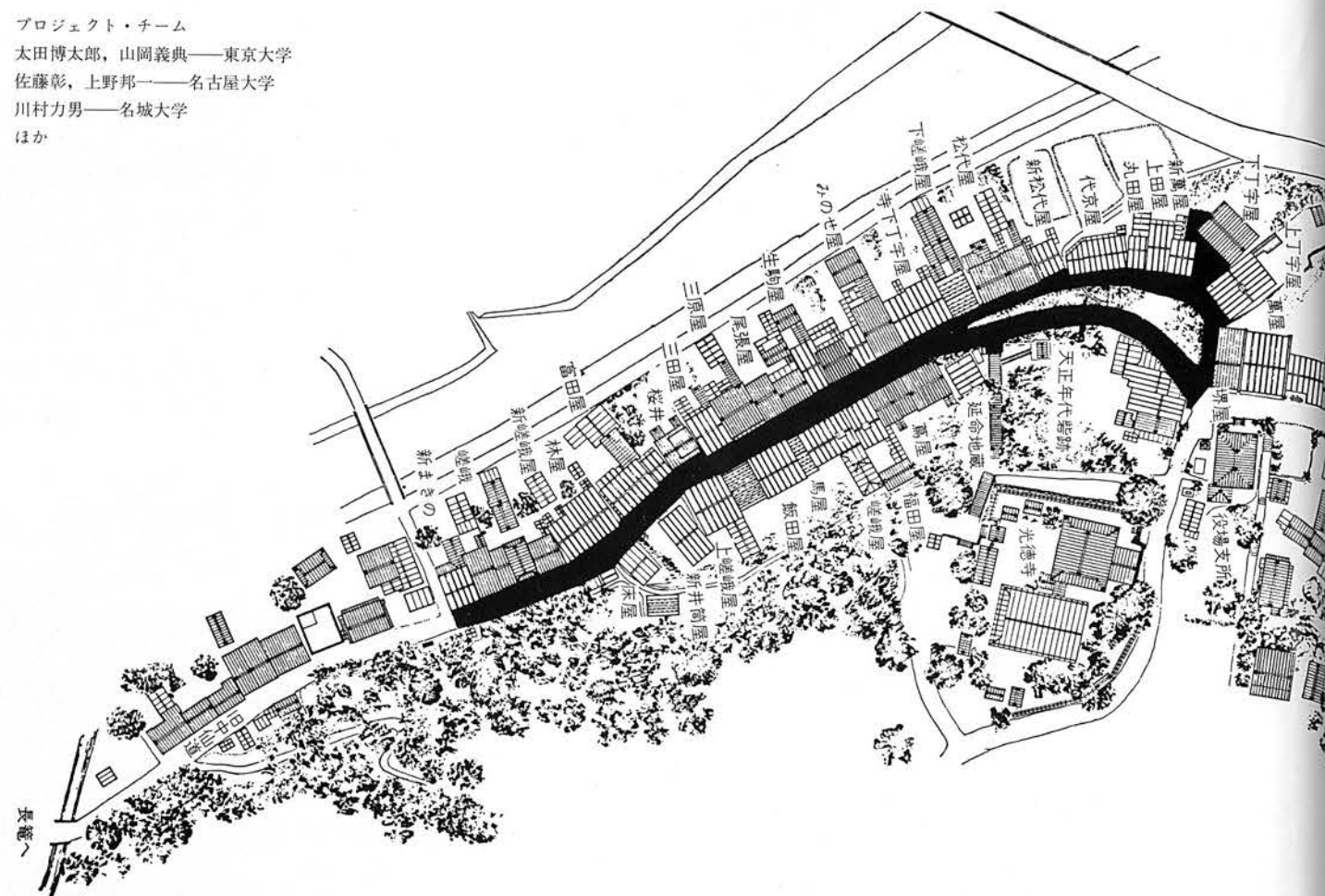
「木曾路はすべて山の中である。」……と、島崎藤村の「夜明け前」に描かれた中山道の宿場町のおもかげを、忽然と現代に再現した木曾・妻籠宿。藤村文学でもゆかりの深い隣宿の馬籠が、眺望のひらけた峠道の町であるのに対し、こちらは緑深い木曾の山なみに包みこまれたような谷あいの町である。そこに曲折してのびる一筋の街道ぞいに、ふいに時間が江戸時代に逆行したように展開する、素朴な山中の宿場町のたたずまいは、木曾路の風光とともに訪れる人びとの心を打つ。

この現代の隠れ里のような妻籠は、実は学術的にも高度なマスター・プランのもとに、地域ぐるみの復元保存、あるいは保存的再開発という、日本では前例のない試みに成功した町でもある。長野県明治100年記念事業として実施され、現在仮史跡指定。今年度の建築学会賞も受賞した。

16 代表的な旅籠屋のエクステリア。店先に積みあげた薪は木賃宿のシンボル。新井筒屋。

17 木曾の山々に囲まれた宿場町・妻籠の景観。木の雨ドイ、置石屋根も山家の風情である。中山道はかつては東海道につぐ、重要な東西の交通路。この道を参勤交替の大名も、無名の庶民の旅人も、足しげく往来した往時がしのばれる。





18

修景計画について

妻籠宿保存事業は、最初は宿全体を対象とする予定だったが、計画が縮小されたため、やや町の外れではあるが保存状態がもっともよかった、寺下地区に対して、まず、適用された。対象家屋26戸。43年度より3ヵ年計画。費経3,600万円。

家屋の修理整備は、その景観上の重要度や破損の程度に応じて、買上げ復元・大修理・中修理・小修理と、段階別において実施された。この場合、単にファサードだけではなく、奥行き1間までは外観に含まれるという観点から、住み手に少々の上生活上の不便はしので提供してもらい、木曾民家の旧状である1間巾の板の間に復原する。そのかわりその奥は近代化も自由、という方法をとっている。なにしろ前例のない事業であるだけに、住み手の理解と協力を得ながら、ケース・バイ・ケースで対応してゆく、舞台裏の苦労がたいへんだったようである。

単なる保存ではなく復元、それも地域環境デザインにまでつながる保存的再開発という難事業のなかでは、サイン問題は最終段階におけるひとつのデテールにすぎない。しかし景観上ゆるがせにできない重要なエレメントとして、綿密な基本ポリシーが通されている。

18 妻籠宿鳥瞰。

19-24 修理実例。

19・20 新井簡屋（大修理）。19 修理前。20 修理後。

21-24 上嵯峨屋（買上げ復元・所有者の住居はこの裏手に新築）。

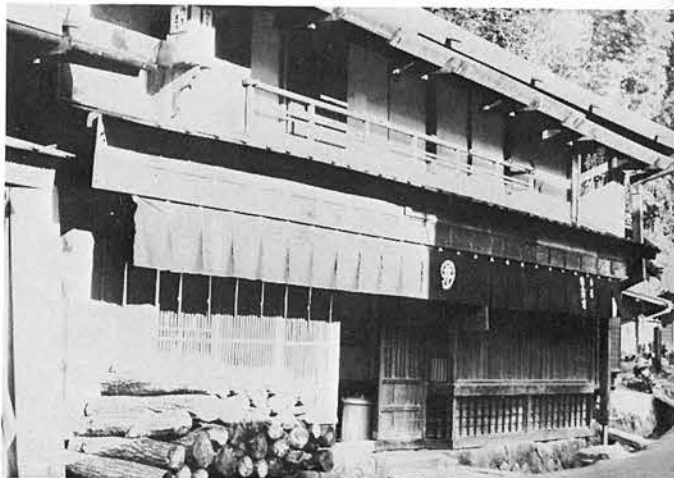
21 修理前。22 修理後。23 修理前立面。24 修理後立面。

18・23・24 図面作成 太田研究室

19-22 写真提供 太田研究室



19



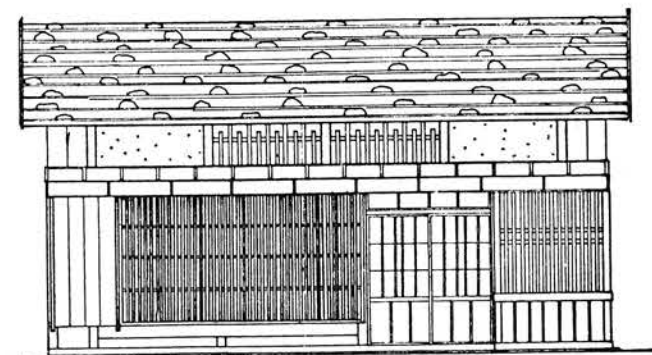
20



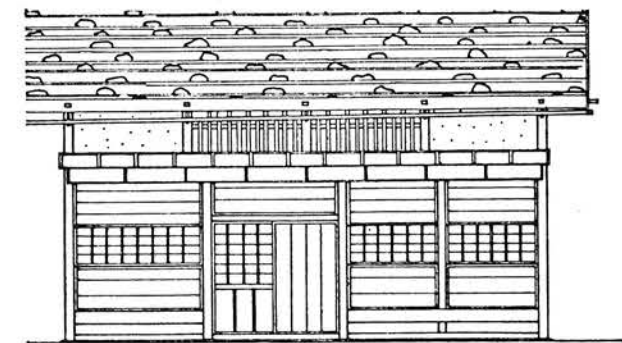
21



22



23



24



25



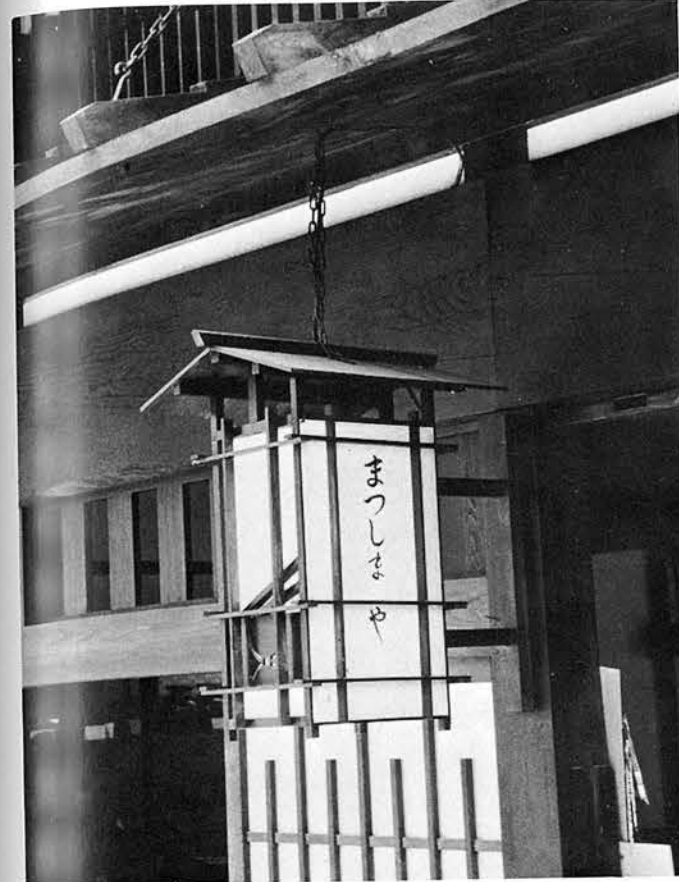
26



27



28



29



30



31



32

25-28 旅館系のサイン4種。いずれも素朴な木彫りの看板で、同一材料とスタイルの共通性のなかで、書き文字のそれぞれに違う個性が美しく目をひく。なお民宿には看板はない。

29 土産物店・まつしまやの行灯看板。この店は復原型ではなく、新しく設計・新築されたもの。

31 同じく土産物店・岩井屋。大戸障子のサイン。

30・32 飲食店系のサイン2種。夜明け前にも出てくる、名物・玉平餅の看板もみえる。



33

33 正徳年間の記録にしたがって復原された高札場。奉行のお触れ書も当時を再現。

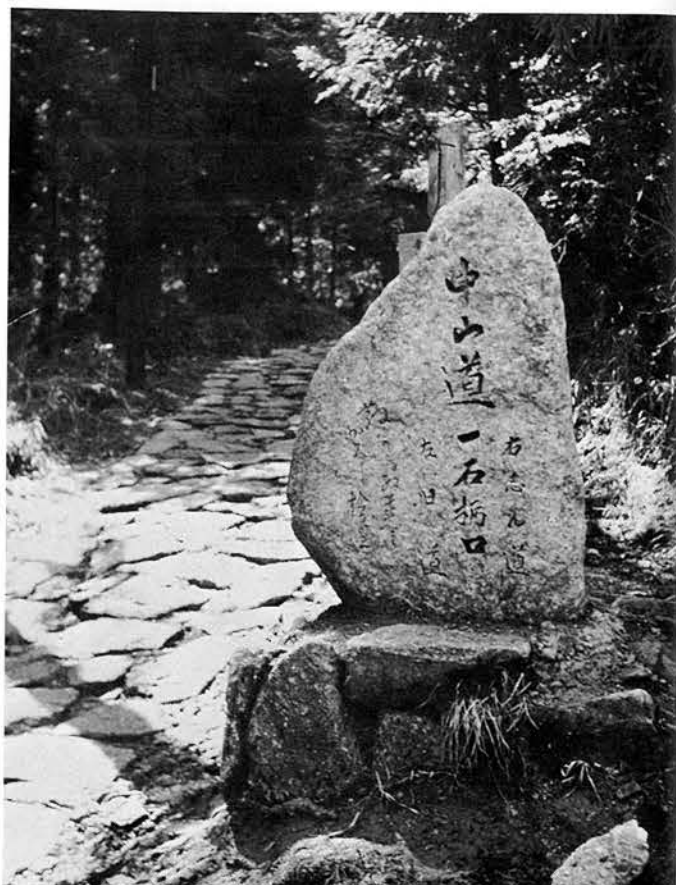
34 県の自然遊歩道計画により石だたみを復元した旧中山道の馬籠——妻籠間に新設された石の道標。

35 火乃要鎮とサイン入りの消火栓入れも、妻籠らしいストリート・ファニチュア。

25—35 撮影・鎌田経世



35



34

木曾路の歴史遺産・妻籠宿

●「江戸時代の宿場町を再現。あえて意識的な時代錯誤に踏切って成功——。」と、復元なった妻籠宿がジャーナリズムの話題を賑わし始めたのは、例の万博が終って間もなくのころだった。あらゆる意味で万博とは対照的に印象づけられた、この妻籠の登場は、いま考えると未来志向の物量文明から、人間志向の環境の時代への転換点をつけるできごとだったように思う。

歴史地区の民家集落の地域ぐるみの復原保存、しかもあくまでも生活文化財としてのそれを、高い次元の観光開発に結びつける——というこの妻籠の実験は、高度に知的な複合作業だった。そして妻籠には、それを可能にする条件が揃っていた。まず妻籠には、木曾11宿の一といわれた歴史的背景がある。しかし明治以後、鉄道も道路もこの町を外れ、時代から取り残されてさびれていた。そのために古い宿場町のおもかげが、比較的良好とどめられたわけであるが宿場機能が生命の町だっただけに、ほかに産業らしい産業もなく、お決まりの過疎化が進行し、観光開発以外に道はないと、町はその方向性を懸命に摸索していた。

もう一つ観光資源としては、藤村文学ゆかりの地という大きいファクターがあった。「夜明け前」の主人公・青山半蔵は隣宿・馬籠本陣の跡継ぎだし、その妻お民は妻籠本陣から嫁にきている。小説ではそうだが実説では、妻籠脇本陣の林家が藤村の初恋人おゆうさんの家である。早くから藤村記念館を設置して、観光ブームにのり始めていた馬籠の存在も刺激だったが、その俗化の進行もいい教訓だった。それから地元に、そうした条件を総合して新しく方向づけることのできる識見と、並み外れた行動力の持主である強力なリーダー役がいた。現南木曾町観光係長の小林俊彦氏である。

氏は、「妻籠宿の保存に憑かれた男」といわれている。そういう氏を理解し、その精力的な活動を終始バック・アップされてきたのが、南木曾町長・片山亮喜氏である。こうして妻籠宿保存問題は、地域ぐるみの住民運動となって盛り上がった。そして県を動かして長野県明治100年記念事業の指定をかちとる一方で、日本建築学の第1人者である太田博太郎氏の、学術的協力を得ることに成功した。妻籠の成功の基礎は、この時に定まったといえるだろう。

●太田氏がここで打出された保存の哲学——単なる現状凍結保存ではなく、史料的価値を高めるための復原保存。ひいては積極的な環境デザインにつながる保存的再開発——というそれは、点から面へ拡大してきた文化財保存問題の今後、ユニークな指針を示すものとして注目された。国宝・重文級の古文化財の修復計画は、これまでも数多く手がけてこられた氏としても、集落保存というのは初めてで、情熱をもってこの計画に当られたようである。

ところで太田氏に、こんどのSDA賞受賞についての感想をうかがうと、「どういふことか、よくわからなかった。」と笑われた。そういえば高山でも、原田氏に同じような質問を受けた。〈サイン環境〉という概念は確かにかなり難解ではあるが、それはまた後のSDA委員の発言にゆずるとして、妻籠の場合は「そういう意味では看板類も新しいことは何もなく、昔の状態を再現しただけ。」である。しかし「だいたい、今の町並みを破壊する大きい要素は看板だね。」と、妻籠にももとは大小さまざまな看板類が溢れていて、町は見る

影もなかったこと。まずその大整理と規制が問題だったことなどを語られた。たとえば美容院とか日用品の店など、住民相手の商売は小さい町だからよく知られているし、別に看板など出さなくてもすむ。また民宿も公平に客を割当てるから看板は不要……などと、大ナタがふるわれたというから、かなり規制も徹底している。

ただし規制といっても、別に法的な強制力はない。あくまでも住民自治の精神と、話合いのルールに基く自己規制なのだが、小さい町だけにまとまりやすく、また住民のほとんど全部が何かの形で観光事業に参加し、利害が一致しているために別に不満はないようである。それからこんどは改めてサイン類も、地域修景計画という大きな計画の一環として組み込まれてゆくわけであるが、家屋修復費が事業費でまかなわれたのに対し、公共サイン系は別として旅館・土産物屋などの看板はだいたい各戸負担、というのは、看板というものの本質に根ざしているようでおもしろい。またそれらの看板の文字は、小林氏自身が達筆をふるったものが多いという。

●妻籠の成功は、文化財保存事業という第1義の目的からいえば、実はこれから本番の問題である。文化財としての町並みをよりよく保全することが、同時に情報価値を生み、観光開発にもつながるというこの複合作業は、高度の緊張感をもって持続しないと、どこかで関数関係のバランスがくずれる危険性をひそめている。そのため、とくにマス・ツーリズムの波にさらされて観光の質が落ちることと、外部資本の侵入を、妻籠では警戒している。事業が本決まりになった43年、小林氏を中心に「妻籠を愛する会」が結成されて、「貸さない・売らない・こわさない」の3原則を掲げた住民憲章のもとに、住民運動の中核となっているが、いまその3原則を再確認して、住民意識の強化にのりだしているという。

この住民憲章というのはひじょうにきびしいものだそうで、たとえば現在日曜祭日に実施している自動車規制問題がある。これは45年5月から、正式に公安委員会の許可がおりたが、それ以前から住民間のルールとして実行していた。観光客が規制を無視して車で、りこんできた場合でも、住民が結束して追いついたりしている。また観光バスは絶対に寺下地区へは入れないし、観光バスも何台でくるといふような申し込みは断わるそうである。ゆくゆく山の手側への道路新設問題が解決したら、この通りは一切自動車交通をシャット・アウトする予定だという。

また第1次計画に洩れた地区でも自費改修も含めて事業進行中だが、妻籠宿内の建築物は、外観だけの変更もまったく新築の場合でも、すべて太田氏の手を通すことになっている。これも住民憲章のきびしいルールの一つである。妻籠の次の課題は町全体の復原と、焼失していまはモルタル塗りの営林署になってしまっている、妻籠本陣の再建である。もちろんこれは、国庫の補助を期待しなくてはならない大事業ではあるのだが……。

妻籠の成功に刺激されて、馬籠にも俗化から脱皮しようという動きがおきているそうだし、しだいに他の町々にもその影響が及びはじめているのは意味が深い。木曾11宿最北端の奈良井宿など、本腰入れてやはり太田氏に修景計画を依頼し、氏も受諾されていま調査研究に着手したところだそうである。いずれは木曾路の風光を縫いつづった街道筋の宿場宿場のおもかげが、かなりのていどに再現されるだろう。しかしいま問題は最近の林野行政である。そこから無計画に自然の破壊が進行すればモトも子もなくなる。「いずれにしろ環境全体の保存だから……。」と太田氏も力説されていた。